

この少年は、名を知られなかった。私は仮にケーと名づけておきます。

ケーがこの世界を旅行したことがありました。ある日、彼は不思議な町にきました。この町は「眠い町」という名がついておりました。見ると、なんとなく活気がない。また音ひとつ聞こえてこない寂然とした町であります。また建物とっては、いずれも古びていて、壊れたところも修繕するではなく、煙ひとつ上がっているのが見えません。それは工場などがひとつもないからでありました。

町はただただとして、平地の上に横たわっているばかりであります。しかるに、どうしてこの町を「眠い町」というかといいますと、だれでもこの町を通ったものは、不思議なことには、しぜんと体が疲れてきて眠くなるからでありました。それで日に幾人となこの町を通る旅人が、みなこの町にきかかると、急に体に疲れを覚えて眠くなりますので、町はずれの木かげの下や、もしくは町の中にある石の上に腰を下ろして、しばらく休もうといたしますうちに、まるで深い深い穴の中にでも引き込まれるように眠くなって、つい知らず知らず眠ってしまいます。

ようやく目がさめた時分には、もういつしか日が暮れかかっているのに、驚いて起き上がって道を急ぐのでありました。この話がだれからだれに伝わるとなく広がって、旅するひとびとはこの町を通ることをおそれました。そして、わざわざこの町を通ることを避けて、ほかのほうを遠まわりをしてゆくものもありました。

ケーは、人々のおそれるこの「眠い町」が見たかったのです。人の恐ろしがる町へ行って

みたいものだ。己ばかりはけっして眠^{ねむ}くなつたとて、我慢^{がまん}をして眠^{ねむ}りはしないと心^{こころ}に決^きめ

て、好奇心^{こうきしん}の誘^{さそ}うままに、その「眠^{ねむ}い町^{まち}」の方^{ほう}を指^さして歩^{ある}いてきました。

なるほどこの町^{まち}にきてみると、それは人々^{ひとびと}のいっただよ^きうに気味^きの悪^{わる}い町^{まち}でありました。音^{おと}

ひとつ聞^きこえるではなく、寂然^{しん}として昼間^{ひるま}も夜^{よる}のようでありました。また烟^{けむり}ひとつ上^あがっ

ているではなく、なにひとつ見^みるようなものはありません。どの家^{いえ}も戸^とを閉^しめきっています。

まるで町^{まち}全体^{ぜんたい}が、ち^しょうど死^しんだもの^{しず}のように静^{しず}かでありました。

ケーは壊^{こわ}れかかった黄^{きいろ}色^{つち}な土^{ある}のへいについて歩^{やぶ}いたり、破^とれた戸^{なか}のすきまから中^{なか}のよう

すをのぞいたりしました。けれど、家^{いえ}の中^{なか}には人^{ひと}が住^すんでいるのか、それともだれも住^すんで

いないのかわからないほど静^{しず}かでありました。たまたまやせた犬^{いぬ}が、どこからきたものか、

ひよろひよろとした歩^{あゆ}みつきで町^{まち}の中^{なか}をうろついているのを見^みました。ケーは、この犬^{いぬ}は

き^{たび}と旅^つ人が連^{いぬ}れてきた犬^{いぬ}であらう、それがこの町^{まち}の中^{なか}で主^{しゅ}人^{じん}を見^み失^{うしな}って、こうしてうろ

ついているのであらうと思^{おも}いました。ケーはこうして、この町^{まち}の中^{なか}を探^{たん}検^{けん}していますうち

に、いつともなしに体^{からだ}が疲^{つか}れてきました。

「ははあ、なんだか疲^{つか}れて、眠^{ねむ}くなってきたぞ。ここ^{ねむ}で眠^{ねむ}っちゃならない。我慢^{がまん}をしていなくちゃならない。」

と、ケーは独^{ひと}り言^{こと}をして、自^じ分^{ぶん}で気^きを励^{はげ}しました。

けれど、それは、ち^{ますいやく}ょうど麻^ま酔^{すい}薬^{やく}をか^かがされ^されたとき^{とき}のよう^{よう}に、体^{からだ}がだ^だん^{だん}し^しび^びれてき

ました。そして、もうすこしでもこうしていることができ^{でき}なくな^なったほど、眠^{ねむ}くな^なってきま

したので、ケーはついに我慢がしきれなくなって、そのへいの辺に倒れたまま、前後も忘

れて高いいびきをかいて寝入ってしまいました。

よく眠ったと思いますと、だれか自分を揺り起こしているようでありましたから、ケーは

驚いて目をみはって起き上がりますと、いつのまにやら日はまったく暮れていて、四辺に

は青い月の光が冷ややかに彩っていました。

「もう何時ごろだろう、これはしまったことをしてしまった。いくら眠くても、我慢をして

眠るのではなかったが。」

と、ケーは大いに後悔しました。けれども、もはやしかたがありません。

彼は、そこに落ちていた自分の帽子を拾い上げて、それをかぶりました。

そして四辺を見まわしますと、すぐ自分のそばに一人のじいさんが、大きな袋をかつい

で立っていました。

ケーは、このじいさんを見ると、だれか自分を揺り起こしたように思ったが、このじいさ

んであったかと考えましたから、彼は臆する色なく、そのじいさんの方に歩いて近づきま

した。月の光で、よくそのじいさんの姿を見守ると、破れた洋服を着て、古くなったぼ

ろぐつをはいていました。もうだいぶの年とみえて、白いひげが伸びていました。

「あなたはだれですか。」

と、少年は声に力を入れて問いました。

するとじいさんは、とぼとぼとした歩きつきをして、ケーの方に寄ってきて、

「^{わたし}私だ、^おおまえを^{わたし}起こしたのは！^{わたし}私はおまえに^{たの}頼みがある。じつは^{わたし}私がこの^{ねむ まち た}眠い町を建

てたのだ。^{わたし}私はこの^{まち}町の^{ぬし}主である。けれど、おまえも^み見るように、^{わたし}私はいまだい^{とし と}ぶ年を取

っている。それで、おまえに^{たの}頼みがあるのだが、ひとつ^{わたし たの}私の^き頼みを聞いてくれぬか。」

と、その^{しょうねん}じいさんは、この^{はなし}少年に話しかけました。

ケーは、こういって^{たの}じいさんから^{だんし}頼まれれば、^き男子として聞いてやらぬわけにはゆきませ
ん。

「^{ぼく}僕の^{ちから}力でできることなら、なんでもしてあげよう。」

ケーは、この^{ちか}じいさんに^{しょうねん}誓いました。じいさんは、この^{ことば}少年の^き言葉を聞いて、ひじょう
に^{よろこ}喜びました。

「^{わたし}やっと^{あんしん}私は安心した。そんならおまえに^{はなし}話すでしょう。^{わたし}私は、この^{せかい}世界に^{むかし}昔から^す住

んでいた^{にんげん}人間である。けれど、どこからか^{あた}新しい^{にんげん}人間がやってきて、^{わたし}私の^{りょうど}領土をみんな

^{うば}奪ってしまった。そして^{わたし}私の^も持っていた^{とち}土地の^{うえ}上に^{てつどう}鉄道を敷いたり^し汽船を^{きせん}走らせたり、^{はし}電信

をかけたりしている。こうしてゆくと、いつかこの^{ちきゅう}地球の^{うえ}上は、一本の^{ぼん}木も一つの^き花も^{はな}見ら

れなくなってしまうだろう。^{わたし}私は^{むかし}昔から^{うつく}美しいこの^{やま}山や、^{しんりん}森林や、^{はな}花の^さ咲く^の野原を^{あい}愛す

る。いまの^{にんげん}人間は^{やすみ}すこしの^{つか}休息もなく、^{かん}疲れということも^{かん}感じなかったら、またたくまに

この^{ちきゅう}地球の^{うえ}上は^{さばく}砂漠となってしまうのだ。^{わたし}私は^{ひろう}疲労の^{さばく}砂漠から、^{ふくろ}袋にその^{ひろう}疲労の^{すな}砂を持っ

てきた。^{わたし}私は^{せなか}背中にその^{ふくろ}袋を^{すな}しょっている。この^{すな}砂を^{うえ}すこしばかり、どんなもの^{うえ}の上にて

も^ふ振りかけたなら、そのものは、すぐに^{くさ}腐れ、^{つか}さび、もしくは^{つか}疲れてしまう。で、おまえに

この袋の中の砂を分けてやるから、これからこの世界を歩くところは、どこにでもすこしずつ、この砂をまいていってくれい。」

と、じいさんは、ケーに頼んだのでありました。

少年は、じいさんから、不思議な頼みを受けて、袋を持って、この地球の上を歩きました。ある日、彼はアルプス山の中を歩いていますと、いうにいわれぬいい景色のところがありました。そこには幾百人の土方や工夫が入っていて、昔からの大木をきり倒し、みごとに石をダイナマイトで打ち砕いて、その後から鉄道を敷いておりました。そこで少年は、袋の中から砂を取り出して、せっかく敷いたレールの上に振りかけました。すると、見るまに白く光っていた鋼鉄のレールは真っ赤にさびたように見えたのでありました……。

またある繁華な雑沓をきわめた都会をケーが歩いていましたときに、むこうから走ってきた自動車が、危うく殺すばかりに一人のでっち小僧をはねとばして、ふりむきもせずゆきすぎようとしてしまったから、彼は袋の砂をつかむが早いかな、車輪に投げかけました。すると見るまに車の運転は止まってしまいました。で、群集は、この無礼な自動車を難なく押さえることができました。

またあるとき、ケーは土木工事をしているそばを通りかかりますと、多くの人足が疲れ汗を流していました。それを見ると気の毒になりましたから、彼は、ごくすこしばかりの砂を監督人の体にまきかけました。と、監督は、たちまちの間に眠気をもよおし、「さあ、みんなも、ちっと休むだ。」

とって、^{かれ}彼は、そこにある^{ぼうし}帽子を^{あたま}頭に^あ当てて^ひ日の^{ひかり}光をさえぎりながら、ぐうぐうと^ね寝こんでしまいました。

ケーは、^{きしゃ}汽車に乗ったり、^{きせん}汽船に乗ったり、また^{てつこうじょう}鉄工場にいたりして、この^{すな}砂をいたるところでまきましたから、とうとう^{すな}砂はなくなってしまいました。

「この^{すな}砂がなくなったら、ふたたびこの^{ねむ まち}眠い町に^{かえ}帰ってこい。すると、この^{くに}国の^{おうじ}皇子にしてやる。」

と、じいさんのい^{ことば}った^{おも}言^だ葉を^{しょうねん}思い出し、^{おも}少年は、じいさんにあ^{おも}おうと思^{ねむ まち}って、「眠い町」にたびで^{たびで}旅出をしました。

^{いくにち}幾日かの^{あと}後「^{ねむ まち}眠い町」にきました。けれども、いつのまにか^{むかし}昔^{はいいろ}見た^{たても}ような^{たても}灰色の^{たても}建物は

^{あとかた}跡形もありませんでした。のみならず、そこには^{おお}大きな^{たても}建物が^{なら}並んで、^{けむり}煙^{そら}が空にみなぎっ

ているばかりでなく、^{てつこうじょう}鉄工場からは^{ひび}響きが^お起こってきて、^{でんせん}電線はくもの^す巣のように^は張られ、

^{でんしゃ}電車は^{しちゆう}市中を^{じゅうおう}縦横に^{はし}走っていました。

この^あ有り^{さま}様を見ると、あまりの^{おどろ}驚きに、^{しょうねん}少年は^{こえ}声をたてることもできず、^{おどろ}驚きの^{まなこ}眼を

みはって、いっしょうけんめいにその^{こうけい}光景を^{みまも}見守っていました。